

## 国指定重要文化財

# きゅうやまむら け じゅうたく 旧山邑家住宅 (ヨドコウ迎賓館) げいひんかん

所有者	株式会社淀川製鋼所
原設計者	フランク・ロイド・ライト (Frank Lloyd Wright)
実施設計者	遠藤新・南信 (遠藤新建築創作所)
施工者	女良工務店
構造	鉄筋コンクリート造 4階建
建築面積	359.1㎡
延面積	約 542.43㎡
竣工年	大正 13 年 (1924)
指定年月日	昭和 49 年 (1974) 5 月 21 日
その他指定等	ひょうごの近代住宅 100 選



**国** 指定重要文化財旧山邑家住宅(ヨドコウ迎賓館)は、「櫻正宗」の銘柄で知られる灘五郷の一つ、魚崎郷の山邑酒造株式会社(現在の櫻正宗株式会社) 8代目当主・山邑太左衛門が建てた別邸です。太左衛門の長女の婿で、後に衆議院議長を務めた星島二郎が、当時、東京の旧帝国ホテル建設のために来日していたアメリカの建築家、フランク・ロイド・ライト(p.15)の弟子の遠藤新と友人であったため、星島の推薦により、本建物の設計を依頼しました。大正7年(1918)、ライトは本建物の原設計を行いました。着工前にアメリカへ帰国したため、工事はライトの弟子である遠藤・南信の実施設計と施工監理により大正12年(1923)に着手され、大正13年(1924)に竣工しました。



**昭**和10年(1935)、本建物は実業家に売却され、終戦直後には進駐軍の社交場としても使用されました。株式会社淀川製鋼所の所有になったのは昭和22年(1947)からで、社長邸や社員寮などに使用されました。その後、老朽化のため、昭和46年(1971)には建物を解体する計画が出されましたが、保存運動が実を結び、計画は白紙となり、昭和49年(1974)5月21日に文化財名称を「旧山邑家住宅(淀川製鋼迎賓館)」として、鉄筋コンクリート造の住宅建築ではじめて、国指定重要文化財に指定されました。その後、昭和60～63年(1985～1988)に保存修理工事を実施し、平成元年(1989)からヨドコウ迎賓館として一般公開され、現在に至ります。建物の大規模な保存修理工事は、これまでに3回実施されており、前述の工事のほか、平成7～10年(1995～1998)の阪神・淡路大震災に伴う災害復旧工事(p.13)と平成28～30年(2016～2018)の保存修理工事を経ています。

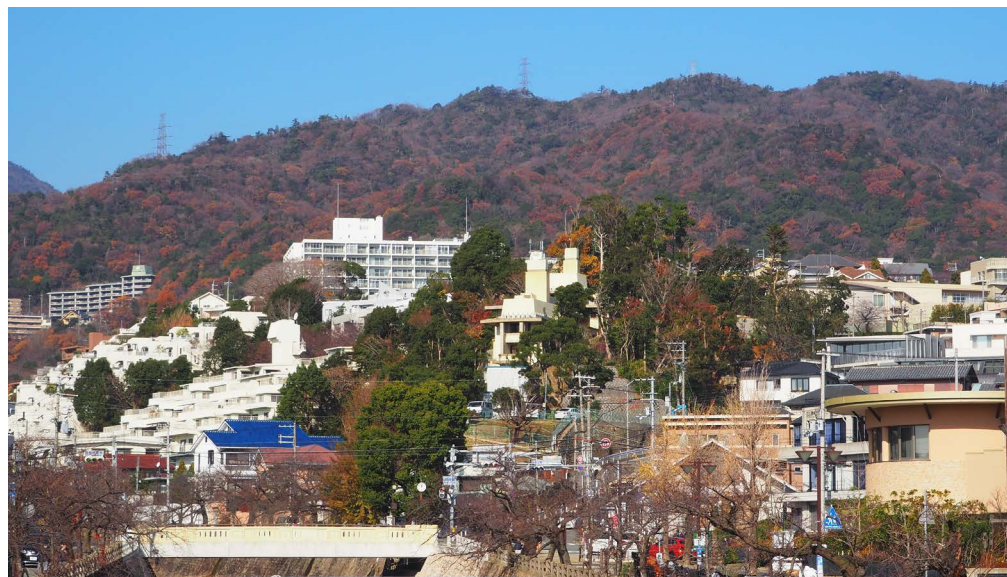
所在地	芦屋市山手町3-10
電話番号	0797-38-1720
開館日	水・土・日曜日と祝日
開館時間	10～16時(入館は15時30分まで)
入館料	大人500円 小・中・高校生200円
アクセス	阪急芦屋川駅より北へ徒歩約10分



本建物は、芦屋川東岸の六甲山地からのびる丘陵の斜面を上手く利用して、階段状に建てられています。そのため、4階建でありながら、どの断面も1階または2階までの構造となっています。六甲山地の緑と一体化したこの景観を損なわないために、芦屋市は平成10年（1998）に本建物の北側の土地を買い上げて、山手南緑地として整備し、景観を保護しています。



緑に包まれた竣工当時の様子（東から）／出典：『建築写真類聚』第5期第13（文化住宅 巻4）大正15年〔1926〕刊行



六甲山地の自然に囲まれた旧山邑家住宅（ヨドコウ迎賓館）（南から）



2階の応接室。大谷石製のマンツルピースや東西の大きな窓、左右対称に統一されたデザインが特徴的。つくり付けの長椅子は、竣工当時の技術で修復されている。

おおやいし  
大谷石

栃木県宇都宮市大谷町で産出する凝灰岩で、軽くて軟らかく、「ミソ」と呼ばれる斑点（孔）が不規則に見られるのが特徴。ライトは、旧帝国ホテルや旧山邑家住宅（ヨドコウ迎賓館）をはじめ、日本で設計したほとんどの建物に大谷石を使用した。なお、旧山邑家住宅（ヨドコウ迎賓館）の「石工事」は、芦屋の石材業者・村瀬栄三郎が請負ったとされる。



各部屋の天井付近には、全体で合計170個の小窓が設けられている。本建物には天井照明がないため、小窓の内120個が自然光を採りこむ役割を担っている。また、小窓の外側には幾何学模様（きかがく）が施された擬石飾り（p.14）が設けられている。



2階応接室南側のバルコニー